



ウラン探鉱 ウラン濃縮技術の開発

ウラン探鉱

残存する海外ウラン権益の処分については、
アーネムランドウエスト権益の海外企業への売却
手続きを行った。

また、オーストラリア法人の精算準備を行った。

(東濃地科学センター)

ウラン濃縮技術の開発

1. 原型プラント

第一運転単位 (DOP 1) は2001年2月に、原料
の供給を終了し、窒素ガスを封入し維持している
(第二運転単位 (DOP 2) については、1999年11
月に、窒素ガスを封入)。

回収ウラン製品の輸送容器への詰め替えについ
ては、全シリンダ31本の詰め替えを完了した。

2. 滞留ウラン回収技術開発

濃縮機器やプラント内に滞留しているウランを
回収することを目的とする滞留ウラン回収技術開

発については、フッ化ガス (7フッ化ヨウ素) 製
造設備の運転を2002年2月から開始した。

濃縮工学施設においては、遠心機の寿命延長を
目的として、1ヶ月間のフッ化ガス (7フッ化ヨ
ウ素) による遠心機試験を2001年12月上旬に終了
し、その後、DOP 2遠心機セットを用いた長期化
運転技術開発に関する試験のための設備改造に着
手した。

(人形：環境保全技術開発部)